
北へ・・・

Haruka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北へ・・・

【Zコード】

Z1333T

【作者名】

Haruka

【あらすじ】

2012年12月22日・・・人類滅亡の日。

孤独なハーフ女子高生である 土方カンナ『ひじかたかんな』はすべての最後を見届け、逝く・・・はずだった。
だが、彼女は生きた。

武士の時代、江戸時代。

彼女の行った時代、そこは幕末の京。

尊皇派と佐幕派に分かれ、対立しそれは時間が経つとともに拡大していく。

そんな争いの中、祖先と出会い、歴史上の人物達と出会い、別れ、そして、彼女は見つけてしまう。

仲間との友情、信頼、そして、熱くなるほどの大愛。

彼女は得意とする剣道を扱い、この世を切り抜け、愛する者のために、友のために戦う。

この激戦の中で、孤独だった彼女が手に入れた物とは・・・

そして、この時代の人間ではないとうに死んでいたはずの彼女の最期とは・・・！

プロローグ

2012年12月22日 午後11時59分59秒 人類は滅亡した・・・

プロローグ

1年前から、何となくだけビニュースでやつてた。

・・・よく、・・・わからないんだけど。

何にも、信じる気なんて無かつた。隕石とか、マヤの予言だとか。

隕石って、まだ観測されてないじやん。

予言なんて、正確だつていう根拠、ハッキリしてないんじやん。

どこに、信じる要素が入ってるんだ!? って、思つてた。

でも、実際に12月に入ると、なんだか太陽の様子がおかしくなつたみたい・・・。

実感がわからなくて、無駄な時間を過ごしている気がする。

世界中では、パニックが起つてゐるつて言つて。

馬鹿馬鹿しいと思つ。強盗とか、無差別殺人とかが急に増えて。

この現代は、臆病者ばかりだ。死という選択肢を持つてない。

だから、恐れて暴れ出すんだ。

国が正式に発表すると、もつとパニックに陥つた。

今まで、音沙汰が無かつた両親が、馬鹿みたいに帰ってきて、あたしに抱きついて泣く。

何もかもが、今更過ぎる。

ずっと、あたしと共にあつてくれたのは、この勇気ある刀だけ。

だつて誰もが自分を一番に優先して生きる。だから、友達なんてのは作らない。

自分が不利になつたとたん切り捨てられるだけだから。

それに対して、この刀は過去、主を信じて戦つていた。勇気あるこの刀を誇りに思う。

だから、最後も傍にいるのはこの刀だけ。

みんな、地下に潜り込んでる。入りきれないからつて、争つたりして。

でも、あたしはなるべく山の頂に近いところへ。

よく、見たかつたから。 見届けたかつたから。

「の刃と共に 終わりを見たかつた。

もつ、終わるというのに、夜空は輝く星でいっぱい。

違う・・・最後だから、・・・思いつきり輝くんだ。

とつとつ、滅亡のとき。

白くまばゆい光が地球全体を包み込んだ。

「・・・ありがとう。兼定」

と同時に、腕時計の針が動くのをやめた。

今日、あたしは、この北海道で死んだ。

勇敢で大切な友と一緒に・・・

あたしは、死んだ……はずだつた。

「時代」

人類の終わりの時、白い光が目に入り込んで、世界もろとも無くなつた。

もちろん、あたしも。

でも・・・今、目の前にあるのは・・・無くなつたはずの、人々と町。

だいぶ、昔くさい気はするけれど。

「おい、お前。 異国の者か？」

・・・異国?・・・。

「半分だけ、そうよ。・・・それが何?」

母が、イタリア人で、あたしは母親似。

だから、日本人つてよりは、イタリア人つてほうが正しいのかも。

まあ、親になんて、似たくはなかつたけど。

「・・・異国は、打ち払つべきだ。」

突然、あたしの目にそいつの腰にあるものが映つた。

ああ・・・。

こんな所で、習つていた剣道が役に立つなんてね。思つてなかつた。

あたしの頭上ではギラリと鈍い光がはなたれた。

条件反射で、手に持つていた刀の鞘で刃を受け、素早く払つた。

「こりがどこのかも分からないつて言つのこ、あたしは走り出す。

ただ、いきなりここに来た理由が知りたくて。

そのためこそ、こりで生きなきやいけなくて。

謎の少女

?・?・?何だろうか。あの女子・?・?。

～謎の少女～

私は、少し買い物をして帰るつかと町の中を歩いていたところなのだが、

突然金色をした何かが、向こうから走ってきた。

すぐに女子だとはわかった。なんだか、不思議な雰囲気をもつた子だ。

今日は天氣が良くて、彼女の金髪はきらきらと太陽の光を反射していた。

それに、異国の服に似ているようなものを身にまとっている。純粋に興味がわいてね。

ちょうど、浪士に追いかけられていたようだったから少しだけ、助けてあげてはと思った。

そう思っていたのに、彼女は、私の田の前で足を止めて浪士に向き合ってしまった。

面白くない。そう思った。

「しょうがないわね。・・・相手してあげる。もう、逃げないんだから。」

なんとも、気の強い。

おかげで、余計に興味がわいてしまった。

「君は、避けてもらえる?」

「嫌よ。邪魔しないで。他人の手なんか借りたくないのよ。」

彼女は、私の目をちゃんと見て言った。

目が、見惚れてしまつほど美しかった。茶色っぽいが、金色がかつていて。

その目を見ると、血で染まつてきた身体全身が、心が洗われていくよつだ。

「うああああーー！」

いきなり、浪士が、彼女に斬りかかった。

私は、間に合わなかつた。助けることなど、出来なかつた。

そう思つた矢先、高い金属音がした。

彼女は、いつの間にか刀を抜いて浪士の刀をはじき飛ばしていた。

居合いだ。 彼女は、剣が使えるのか？

・・・刀は、妖しくも美しく輝いていた。

彼女が使うからだろうか。 剣が生きているようで妖しい光を放つ。

浪士は、手がしびれて小刻みに震えていた。

そいつは、彼女を恐れたのか走つて逃げていった。

「ちょっと、そこの人。」

「あ・・ああ。なんだ？」

私は彼女の、刀をはじき飛ばす程の力に驚いていた。

「今は、何年？それと、ここはどこ？」

よく、わけの分からない事を尋ねてくるが、きっと困っているのだろうと応えてやつた。

「今は、元治元年の6月5日だが？」

「そう。」

そう言って、彼女は刀を鞘に納め、歩き出した。

だが、私はどうしても気になつた。

「少し、待つてくれないか？ その格好では、目立つだろ？ おいで。」

彼女も、目立つと思つたのか、渋々ついてきた。

彼女は、女子にしては、私には及ばないが背が高く、足や腕は細かつた。

しかし、なかなか良い体つきだ。

・・・男だとしても、このような事を思つてしまつのが恥ずかしい。

彼女は、無表情で無言だつた。

人形の様だと思う。 肌は、日本人には無い、異人独特の白さと透明さがあつた。

だが、どこか日本人らしさも持つてゐる様に感じじる。

何なのだろうか。 彼女に、何があつたのだろうか。

今、カンナは窮屈な思いをしていた。
これも、あの訳の分からぬ男のせいである。

「ひょっと、何すんのよ。きつこ……。」

・・・・・

「どうだい？」

男はひょっこりと顔を覗かせた。
・・・目が輝いている。

「ああ。・・・やつぱり、君にほんの着物が似合つてゐる。綺麗だよ。」

カンナは、目を細め、さらに眉間に皺を寄せた。

着物の帯を思つたりしめられ、窮屈で仕方がないといつ顔だ。

「・・・あんた嫌い。・・・じゃ。この着物、ありがとうございます。」

着物を着たままその呉服屋を出ようと一歩ふみだす。
しかし、2歩目はかなわなかつた。

「ひょっと、まちなよ。着物を贈つてあげただから、すこし付き

合つて。」

男は、ニヤリと笑つた。

カンナに、この男の感情は読めなかつた。

「何處?」

「ちよつとした宿に。これから、大事な集まりがあるんだよ。」

(・・・幕末6月5日の集まり・・・?)

カンナは、歴女としての知識を掘り返していた。

「あたし、カンナ。あなたの名前つて、桂小五郎?だつたり。」

男は、表情も変えずにくすりと笑つた。

「さあ?どうだらうねえ。僕もわからないよ。だが、本郷の名前かなんて。」

(こんなホストみたいな男が、後の木戸孝允?
・・・維新の三傑の?)

「まあ、だとしたらちよつといいかも。会いたい人が居て。」

「やう? 良かつたよ。」

桂は、少し疑うような眼つきをしたが、すぐに元へと戻した。

カンナは、確信していた。

この集まりが、尊皇派の会合であり、企てている計画が、失敗に終わることも。

そして、カンナの持つ刀の持ち主が現れることも全て。

（桂には悪いけど、あたしは、佐幕派なの。尊敬してるひとがそういうから。

着物の借りは、いつか。）

宿に着いて、カンナはひとり、部屋の隅で座り、刀を見つめていた。相変わらず、変な視線を感じるが気になどしない。

（やつぱり、あの池田屋事件か。……ちょっと危ないかも。）

カンナは、静かに立ち上がり、「廁だと言つて少し抜けた。外へ出て、周りの様子をうかがい、ある男と田が合つ。見かけは商人。……でも確か……

「ちょっと、そこは薬屋さん。あたしに薬をうつてくださいな。」

カンナがそう言つと、男は、じんわりと汗をかきながら来た。

「今、胃が痛いの。それに効くものはある?」

「へえ・。」

男は、カンナを敵だと思いこんでいる。

カンナは、薬を受け取つて、その薬の包みにボールペンで何かを書き出した。

— 会合は池田屋。副長へ報告を。 —

男は、目を丸くしてカンナを見た。

カンナは、頷く代わりに瞬きをする。

そして、この文を残さないために、水も無いまま薬を口に放り込み、包みは粉々に破つて、男の頭の上に散りばめた。

「見て。紙吹雪。・・きれいでしょう。」

久しぶりにカンナは笑つた。

男の、驚いてから一気に気の抜けた顔が面白くて。

「ああ、『めんなさいね。 お仕事の邪魔しちゃったかしら。』

「いえ。ありがとうございました。」

カンナは、畢歩きで去つていく男の後ろ姿に手を振つた。

(良かつた。ちょっと、安心。・・・後は、待つだけか。)

だんだんと日が暮れ、志士達も酒で酔つてきたようだ。
そんな時でも、刻一刻と、あの歴史的大事件は迫つていた。

舞い込んだ蝶

「あの人予想が珍しく外れましたね。それに応援も来ないみたいですよ。」

「・・・ああ。仕様があるまい。行くぞ。」

宿の外には、浅葱色をまとった者達が数名。

とうとう、このときがやつてきてしまったのだ。

宿内は、相変わらず・・・いや、先にも増して泥酔者が増えている。

それにカンナがため息を吐くと、桂がふと立ち上がり、外へ出て行く。

「ちょっと、逃げるの？」

「まさか。周辺の見回りさ。」

桂は、また読めないような笑顔を作り、

さつと出て行つた。

この男は、見回りをしていてたまたま異変に気づき、一人逃げたのか、

それとも、もともと気づいていて仲間を置いて逃げたのか。
わからない。

だが、これだけは確かだろう。

桂は、ここに戻らない。カンナさえも置いていく。

しかし、それとは反対に、桂はこいつそり戻り、手招きでカンナを呼んだ。

そして、何も言わずに足早に手を引き、歩き出した。

「やめて。・・・今更なによ。」

「あの新選組がここに討ち入つてくる様だ。逃げる。」

簡潔に内容を語つて、また歩き出すのだが、カンナは桂の手を振り払つた。

「とんだ腰抜けね。・・・」

カンナは反対方向に堂々と前を見据え、男顔負けの度胸を見せつける様に一歩一歩を踏みしめる。

桂は、舌打ちをしてカンナに背を向けた。

この男にとって、カンナのこの行動は悔しいものであつたことだろう。

女子に腰抜けと言われ、女子は逃げようとする自分を否定するかの様に堂々とした背中を見せつける。

(・・・・・。ああ。僕は腰抜けさ。

だが、この時代では逃げる者がより長く生きることもある。

それに、僕はここで死体をさらすわけにはいかないのだ。)

桂は、カンナの雰囲気や性格を大層気に入っていたのだがほんの短い時間しか見ることは敵わなかつた。

桂が見たカンナの刀を持つ姿は、美しくも勇ましく、

戦場に向かう武士と同等にたくましかつた。

裏口から宿を出て、なるべく遠くに走っている最中、太い男の声を遠くで聞いた。

「新選組だ！……宿内を改める！……」

（かんな、あいつらを頼んだよ。）

しかし、悲しいことに桂のこの願いは聞き入れられない。
この男は、思い違いをしていた。

カンナは佐幕派であり、尊皇派ではない。

故に、桂の仲間ではなく、新選組につくことになる。

舞い込んだ蝶 其の弐

カンナは、太く男らしい声を聴いた。

「新選組だ！！！宿内を改めるー！」

口元は緩むばかりである。

カンナは心を弾ませていた。

なぜなら、とうとう会いたかった人物と対面することが出来るからであった。

浪士たちは、新選組のかけ声ですっかり酔いが覚めてしまつたらしく、

皆刀を手に立ち上がり、ある浪士は一階である窓から飛び降り、またある浪士は勇敢に立ち向かつてゆく。

部屋の外へ出て行くと、そこはもう地獄絵図のように恐ろしく血で染まっていた。

血のりなんぞではなく、紛れもなく本物である。むせかえるぐらいに濃く漂う匂いにをかいだことのないカンナは胃から上がってきたものをぐつとこらえた。

何人もの人間が、犯罪と言われる殺人を平氣で行つてゐる。変な感覚である。しかし、自然と恐怖は湧いてこなかつた。カンナの心に湧いてくるのは、哀しいという感情だけだった。現代では、哀しいと言つよりも醜いといふ言葉の似合つ人間が多くつたが、

この幕末の時代は、哀しい者ばかりであると。

カンナには、人を斬るときの刃が泣いているようにしか見えなかつた。

皆、同じ刃をしている。

現代には、歴史が面白い。だと、武士はかつていいなどと軽口をたたくものが

居るが、武士とは歴史とはそんなに軽いものではない。

酷く辛くて重いものなのだ。

この時代では、刀を振るう者皆、殺したといひ罪悪感を背負つて生きている。

ならば、その罪悪感の重さを少しでも軽くしてやりたい。

カンナはそう思つてしまつ。

ゆつくりと手元の刀を抜き、なかなか出なかつた足を前へ出した。

カンナは、彼女を仲間だと思っていた浪士を思いつきり斬りつけた。血しぶきが上がり、新品の着物に染みる。

人を斬ることに、少々ためらいは有つたが、一度斬つてしまえばそうでも無くなつてしまつた。

冷たい人間だとカンナは自分で思つ。

しかし、カンナはどんどんと浪士を斬つていく。

彼女の瞳に暖かみなどありはしない。

冷たいが、それでも尚美しい瞳がそこにはあつた。

・・・

「総司！…しつかりしろー総司！…！」

突如、心配するよつた哀しい声が響き渡つた。

カンナは、本で読んだことがあった。

新選組1番隊組長沖田総司は池田屋事件の最中、喀血し倒れたのだ
と。

助けなければととにかく沖田の元へと駆けた。

声のする方へ行つてみれば、浪士の死体が床を埋めていたが、そ
の中に

一人だけ浅葱色の羽織を羽織つた若い男が倒れていた。

彼の手が血で染まっている。

喀血する際、手で口を覆つたのだろう。

・・・となれば、あれは確実に沖田である。

近くには、何度も何度も沖田の名を呼ぶ大柄の男が彼を守るよう立
ちちはだかっている。

見たところ、年齢的に新選組局長である近藤勇だらう。

「局長ですよね。沖田さんはあたしがしつかりと外まで運びます。
避けてはもういえないのでしょうか？」

カンナは、斬られるといつ最悪の場合も想定して向かつた。

「し・・しかし…」

「お願ひ。あたしを信じて。あたしが沖田さんを守つてみせる…」

近藤も考てる暇なんて無い。

沖田も、ずっとここに倒れていっては、浪士に不意を突かれ斬られて
しまう。

「・・・っわかった!!任せたぞ!!」

「はい!!!」

カンナは、沖田を担いで引きずる。

沖田が若く20代だとしても、もう男であつて身体も大きく、重い。女にはきつい仕事だ。

それでも、浪士を斬りつけながら必死に出口へと向かつて歩いた。自然と汗が滲み出し、息が上がる。

しかし、気にする暇など何処にもなかつた。

カンナはただ、皆が無事で会つて欲しいと願うばかりだ。

面識もない人たちに入れ込むなど珍しいとカンナはつくづく思う。

ようやく池田屋をでたところ、カンナは驚いた。

最初から来ていると思っていた隊士達が居ないのだ。

だとすると、今現在ここではカンナを含め、新選組は11人ということになる。

カンナの知る歴史では、確かに今と変わらぬ状況なのだが、

彼女は池田屋であると事前に知らせたはずである。

何故來ていないのである。

そして、経つた今戦っているのはわずか6人だ。

カンナ、沖田、それから今頃は3人の隊士が怪我を負つて動けないはずである。

あと、どれくらいで応援はやってくるだろうかと
沖田の様子を確認しながら待っていた。

舞い込んだ蝶 其の参

カンナは連れ出した沖田を置いていく筈もなく、
沖田のすぐ隣りで足の先をぱたぱたと上下させている。
まだかまだかと待つばかりである。

ふと、遠くに大勢の足音を聞き、やつとかと音のする方へ身体を向
けてみれば、

その足音は新選組の応援ではなく、会津藩、桑名藩の応援だ。

先に来るのは新選組のはずではなかつたか？等と思いながらも、
カンナは焦つていた。

このままでは新選組ではなく、会津藩らの手中に手柄はおさまつて
しまう。

この状況は、カンナ一人で引き留めなければならなかつた。

・・・さて、どうしたものか。

とにかく、カンナは池田屋の前に立ちはだかるようにして仁王立ち
した。

何も言うことなど決まつては居なかつた。

下手をすれば、斬られてしまう可能性だつて無いわけではない。

しかし、この場に新選組隊士が誰一人としてこちらに手が回らない
以上、

何とかするしかない。

特に新選組に義理立てするようなことはされていないが、
ただ、興味があつた。

カンナの祖先が居る新選組に。

先祖がどのようにして新選組で働いてきたのか、どんな人だったのか
どれだけ剣術が強かつたのか、気になつた。

そして、このカンナの持つ刀の持ち主であるため、一度でも良いから話してみたかった。

藩の応援で来た大勢の兵がカンナを前にして立ち止った。

一番前で兵を引き連れている人物はなかなかの巨漢でさらにかなりのコワ顔だ。普通ならば、後ずさりしているところだろうが、そんなわけにはいかない。

「そここの女、我らを通さんか。」

この男は、声もでかく、低かつた。

迫力がある。兵を引き連れ上に立つだけの力はあるのだろう。しかし、カンナは怯まずに真っ直ぐと睨みつける。

「嫌よ。あなた達を入れるわけにはいかない。」

これは平和に対処したいものだ。

せめて冷静に堂々としているべきだろう。

ここで縮みこまってしまえば、完全に押されてしまつ。

それは避けたかった。

「我らは会津藩の者であるぞ。」

「ふーん。だから？？？あなた達ねえ、この中の状況知らないでしょ。今、この中では激しい斬り合いが続いてる。

敵か味方かなんて見分けてる暇なんて無いの。判断出来るのは、あ
の新選組の

象徴である浅葱色の羽織だけ。

あんたらがそんな普通の格好で入つていつたら、敵だと見なされて斬られるだけよ。

分かるかしら。まあ、無駄死にはしたくないでしょ。うからこいで待機。」

巨漢はグッと黙り込み、唇をかむが負けを認めたくないのかまだ、無理矢理なことを吐く。

「しかし、・・・戦力が足りぬのではないか？たつた10人で討ち入つたと

聴いていたのだが。」

「ええ。10人ではいってつたわ。でも手助けはいらないわよ。なにせ、隊の中でも優秀な幹部が揃つてるもの。

あんたら達が入つていつたとしてもこんな小さな宿だもの。邪魔になるに決まってるわ。」

会津藩らはどうしても手柄を取りたいようだ。

しかし、カンナがそれを許さない。

冷静でいたいと思っているカンナも少々いらついてきている。

「大人しく待機してなさいよ。

それとも、そんなに手柄が欲しいの？

・・・だつたら、何処よりも早く駆けつけなさいよ。

あなた達にこの件の手柄を取る資格なんてない。

遅れたんだから。

・・・とにかく、今回はあなた達の仕事はない。

あるとしたら、後始末ね。」

カンナは透き通った瞳で睨みつけ、兵が地面に座り込むのを確認し

てから

辺りを見回した。

兵達が座り込むと目の前の景色がスッキリした・・・と思えば、既に新選組の応援は兵の後ろに来ていた。

カンナは気まずい空氣から逃れようと再び池田屋内へと歩き出した。

「待て。女子が何だつてこんな所にいる?」

カンナは目でその声の人物を捕らえると、その人物は、カンナが会いたいと願つた者だった。

あのひとである。

写真では服装も髪型も年齢も違つていて、やはりあの新選組の副長である土方歳三だ。間違ひは無い。

この者はカンナの祖先に当たる人物であり、彼女の持つ刀の持ち主でもある。

「・・・貴方に・・会つためです。」

それだけを言って宿内へと入る。

沖田の事は、もう心配ないだろう。

カンナの後から応援の隊士達がぞろぞろと入ってくる。これで安心だ。

・・・と思い刀を抜くと、一人の若い隊士がカンナの肩を叩く。

「あの、これ副長が貴方にと。」

そう言つて手渡されたのは、無造作にたたまれた浅葱色の隊服だ。

受け取るとまだ暖かかった。

先ほどまで土方が着ていたものなのだろう。

「ありがとう。」

さりげなくお礼を言つて羽織を羽織った。

少し大きくぶかぶかな気もしたが文句は言えなかつた。

羽織ると、ほのかに懐かしい香りがした。

それは、祖父が床に伏せていても必ず焚いていた香の香りだ。

木の良い香りがする香で、カンナはそれが好きだった。

そんな香りのする羽織を血で汚すのは気がひけたが、浪士が斬りかかってきたため気にする暇は無かつた。

そうして、夜は明け新選組の隊士では1名が死亡、5名が重傷を負い、

その中の2名は重傷により後に亡くなる事になる。

この事件はカンナの予測した通り「池田屋事件」と呼ばれた。

蝶の正体

池田屋事件が幕を閉じ、新選組は大手柄だ。

カンナは池田屋で何人の人を斬った。

刀は瞬く間に血に染まり、血を吸つた。

人を斬るというものは、殺すというものは気持ちの良いものではない。

しかし、斬らねばならなかつた。

そういう状況にあつたのである。

今、カンナは池田屋から出た。

討ち入りのあつたこの宿は酷い有様だ。

障子が破れ、血しぶきの痕を残しているのは勿論のこと、宿内は死人の山で溢れ、刀傷が壁に刻まれている。

更に、勝手場の飲み水はあかく染まり飲めたものではない。

こんな幕末の時代であるが故にこのような光景がある。

カンナはその光景を目に刻みこんだ。

忘れてしまいたくは無かつたのだ。忘れてしまつては、勇敢に戦い続けた者が

浮かばれぬ。そう感じた。

カンナは血に濡れた刀の剣先を真つ直ぐと空へ向け、池田屋に掲げる。

そんなカンナを土方歳三はただひとり見ていた。

刀を掲げるカンナは歳三の目に美しく映つた。

刀を振つても尚乱れぬ結い上げた金の髪、そして意志の強さを含む

金色の瞳、

哀しげな横顔が朝日に照らされ、数段艶やかになる。血で赤くなつた姿は鬼の姫とも言えるまでの強さと美しさ、それから武士の誇りがそこにはあつた。

歳三は息を飲んだ。

それほどまでにカンナの放つオーラは偉大であった。

カンナが刀を下ろし、ため息が口から出た時、歳三はふと疑問を口にした。

「お前、ここに居るのは俺に会つためだと言つたな。何故だ。」

「貴方を尊敬しているから。・・・」

歳三は、また恋か・・と思つてしまつ。しかし、カンナの話はまだ続いていた。

「私は、確かめたかつた。貴方がどんな人で、どんな風に仕事をこなしているか。

噂なんかじゃなくてこの目で確かめたかつた。」

カンナにとつて、確かに歳三は尊敬に値する人物だったが、歳三の性格や趣味、仕事は正確には現代に残されてはいない。故に自分で確かめなければ、納得がいかぬのだ。

「何故、この池田屋に出入りしていた?」

質問攻めであるが、特に嘘を吐く必要もなく、淡々と応える。

「無理矢理連れてこられて、でも、じきに貴方がここに来ると思つたから。

・・・ここで、隊士の方に会合の事を知らせただけで、伝わらなかつたみたいね。」

「全く知らねえ女を信じるわけねえだろ。」

カンナの伝言は確かに伝わっていたが、信じてもらえなかつたということだった。

カンナは思った。これは、当たり前ではないか。

・・・ひとつを一番信じていないのは自分ではないのか。自分がひとを信じていないので、自分に対する信頼を求めるのは間違いではないか。

「・・・そうね。」

「ああ・・・まあ、とりあえすお前の話をもつと聞きたい。

だが、そっちも色々と用事があるだろ。今日は良く寝て、明日中に新選組屯所に来い。俺が居ないようなら、誰か幹部が居るはずだからそいつに頼んで待たせてもらえ。」

歳三の申し出はカンナにとって嬉しいものだった。
しかし、少し困ることがあった。

金は無いし、着物もこの血で汚れたものしかない。
つまり、泊まる宿も無ければ、着るものもない。

「・・・は・・い。」

これはどうにかするしかないだろう。

こんな治安の悪い京で野宿なんてしてしまえば、何が起るか分からぬ。

そして明日までに着物を調達しなければ新選組屯所になど行けそうにない。

カンナは新選組から離れ、朝日が照らす道を歩いた。

・・・カンナとしては、小学校の劇やら演技などは好みなかったのだが。

カンナは人の良さそうな女性が入つていつた茶屋に目を付ける。
そして、バンバンと戸を叩き・・・

「お願い！・・・つたすけて！・！誰か！・！・！」

なかなかの演技だ。

これならば、だれも疑いはしないだろう。

カンナの取り乱した声と行動に、さつきの女性が急いで出て来て、
カンナの両肩をつかんだ。

「あんた、 どしたん！？ ・・・ つとりあえず、 入りい。」

カンナは女性に守られるようにして家中へ上がった。
・・・これがカンナの取つた一番手つ取り早い方法だ。

カンナは、小さく息を吐いた。

大物女優カンナ

カンナは、じくじくと涙を流し、ある家に上がっていた。

「大丈夫や。 . . .」

正体の知れないカンナを家に入れる親切な女性は、カンナの背をさすつてなだめていた。

「怖かつたやうねえ . . . 。 あないな所に巻き込まれはつて . . . 」

「

カンナは再び嗚咽を漏らし、泣き始め、頷く。
暫く泣きやまず、仕舞いには、女性に優しく抱きしめられる。
しかし、この抱きしめられた時は演技でもなく、本当に泣きやうになつた。

こんなにも優しさを近くに感じたのは初めてだつた。
だから、なるべく長く優しさを感じていたくて暫く泣きやまない事にした。

・・・よひやくカンナは満足し、泣きやんだ。

「 . . . 1J迷惑・・おかげして申し訳・・ありません。」

「そんなこと、いいんよ。全く・・・生浪も祭りの日ぐらい、
静かにしどつたらええのになあ。」

6月6日は、祇園祭で人が賑わっている。

住民としては、騒ぎを起さず、祭りを楽しみたいのだろう。祭りの日に騒ぎが起こりては、外へ出ることも避けたくなる。祭りどころではない。

「……あの、……実は私、池田屋で住み込みで働いていて……頼れる人も……ついたくて……」

「そうやつたの。……そや。うちに暫く居たらええ。ちゃんと、仕事もあるんやさかい。」

カンナは思い通りにことが進んでホッと安心する。

「……では、……本当に暫くの間だけ、よろしくお願ひ致します。

私は、名を敢菜かんなと申します」

カンナが頭を下げるとき女性は元気の良い笑顔で声を張った。

「あたしは勝かついうのんや。よろしくう。あんたはべっぴんやから、商売繁盛しやはるんやないかね？」

この女性の笑顔には、人を元気づける力がある。

カンナは自然と自分も笑顔になつていてことに気が付きはしなかつた。

現代では笑わないカンナが、この時代ではいとも簡単に笑顔になる。そんなこの時代は、純粹に綺麗だと言えるのではないだろうか。

嘘は、どんな時代にもあるものだが、現代よりはずつと少なくまた、人の笑顔は輝いている。

笑顔だけは、偽りのないものだった。

カンナはこの掛茶屋で働くことになった。
かけぢゃや

掛茶屋は、宿のようなもので料理や酒も出している。着物は勝のものを頂いた。

お古であるらしいのだが、随分と新しそうに見えた。柄も色も鮮やかで勝のものではないような気もしたのだが、聞きはしなかつた。

カンナは初日から、急きょ料理を頼まれてしまい、少々この時代特有の火の扱いに戸惑つてしまつたが、何とか作り終えた。それを客に出してきた勝は、二口二口としている。

「敢那ちゃん、ありがとうねえ。あの煮物が評判ええんやわ。これからも色々と作つてくれはつたら嬉しいんやけど。」

カンナは嬉しかつた。

人にこんな風に必要とされることが、こんなにも嬉しいとは思いもしなかつた。

涙が出そつたが、泣くところではないといふれる。

「はい。作らせてください。」

カンナは、この時代に来てまもないうちに着物の着方を覚え、火の扱いも慣れ始めていた。こんなに早く慣れるものなのかなと思っていたが、早く慣れるのはありがたい事だった。

ガラス玉

池田屋事件のあつた次の日のこと……。
カンナは道に迷っていた。

(……ここは……さつきも通った……かも?
……新選組の屯所って何処お??)

カンナは、頭を抱えて行ったり来たりを繰り返していた。
そんな様子を見ている人々は確かに大勢居るのだが、誰一人として
声を掛けではない。

それは、カンナが異常な変わり者だからだ。

外見が異人なのに着物を着こなし、更におなごなのに刀を持って歩
いている。

まさかおなごが刀を抜くとは思っていないだろうが、やはり、近づ
きたくはないのだ。

(ん?・・・そつか。この頃の屯所って、壬生寺の近くだって本に
書いてあつたな。

・・・うん。壬生浪みぶのつて呼ばれてるぐらいだし。

これぐらい聞け。・・・一言ですむはず!)

カンナは気合いを入れて周りの人間に聞こえと氣合いを入れた。

「あのお、すみません……」

カンナが声を掛けたのはいかにも氣の弱そうな商人だったのだが、

逆に絡まれるよりはましだと思つことにした。

その商人は肩をふるわせたが、逃げずに対応してくれた。

「壬生寺つて何処にあるか分かります?」

カンナの普通のおなじの問いかけに安心したのか、
分かりやすくゆっくりと説明をしてくれた。

カンナはお礼を言つて、説明を受けた方向へと歩みを進めた。

説明の通りに歩いていくと、あつといづ間に壬生寺に着いてしまつた。

こんなに簡単で良いものかと思つてしまうのだが・・・。

そんな時、境内の方から子どもの楽しそうな声が聞こえた。

カンナは子どもが好きだった。

大人は嘘が多くて汚いが、子どもはまだそんなことを知らなくて純粹だからか、

一緒にいると安心できて、汚れた社会のすすで汚れてしまった自分を綺麗に癒してくれる。そんな感覚があるので。

カンナは声のする方へと向かい、子ども達の姿を見た。

そして、先ほどは陰になつていてわかりずらかつたが、

子ども達の輪の中には池田屋事件の際にカンナが外まで担いでいった、

沖田総司が居るのではないか。

喀血して倒れたといつのに、翌日にはもう既に子どもと走り回つている。

何という回復力だろうか。

しかし、本当に回復しているのだろうか・・・。

カンナは氣になつて声を掛けた。

「ほんにちは。・・・ねえ、あなたたち、今日の所は『れぐりい』にしてくれるかな?
・・・このお兄さんね、疲れちゃつてるの。今日ぐらい、休ませてあげて。」

子ども達は頬を膨らませてカンナを見る。

「・・・じゃあ、今日は私と一緒に遊ぼう。お兄さんが元気になつたら、
もひとつ楽しく遊べるよ。」

子ども達は、納得してカンナの手を引っ張つた。

沖田は首をかしげて不思議そうな顔をしているがカンナはそんな視線を無視した。

カンナと子ども達だけで遊んでいれば、沖田も帰ると思つたのだが、
子ども達が帰るまでずっと座つて見ていたようだつた。

子ども達は、カンナが氣に入ったのか満面の笑みを見せ、カンナの取り合いで始めた。しかし、カンナはそれを沈めて見せた。

カンナの子ども達に向ける柔らかい笑顔は安心感をあたえ、人を良く寄せ付けた。

そんなカンナに子ども達はまた遊んでと言つた。

子ども達が帰つて、沖田はようやく立ち上がつた。

「君、子どもの扱いが慣れてるんだね。」

沖田は人を殺すとは思えない程優しい笑顔を向けた。

「慣れているというか、基本的に子どもが好きで。だつて、子どもは純粋で嘘がないから。」

沖田は一そう。一とせりげなく返した。

「それより、昨日倒れた人がこんな所で遊んでるなんて・・・。全く・・・怪我人が何してるんだか。」

カンナは呆れてため息を吐く。
あえて、病人とは言わなかつた。
沖田は、下を見て苦笑いをした。

「もう・・・君も過保護かあ。しちうがないなあ。
屯所に行くんでしょ。一緒に行こう。これなら、いくら方向首痴の人でも
迷わないよ。」

沖田には、カンナが迷つて何とか壬生寺にたどり着いたことが分かつっていた。

沖田は妙に鋭い所がある。
だからだろうか。子どもとの駆け引きが上手い。

沖田とは、屯所までの短い時間で随分と話し込んだ。
それでカンナには沖田の本質が見えた。

沖田は、史実上の通り好青年だ。
そして、良く人をからかう所があるが、本当は仲間思いで子供にも
も好かれる
綺麗で透き通った心の持ち主だ。

そんな彼が、刀を手にすれば鬼へと化し、稽古でも隊士をめつた打
ちにするというのだから
何とも恐ろしいものだ。

鬼

「着いちやつた。・・・」**じだよ。**おいで。」

カンナは沖田の後をついて行く。
しかし、なんだか先ほどから視線を何度も感じていた。
それは、平隊士達のものだった。

全く女に興味を示さなかつた沖田が美しい、しかも異人の女を連れ
てきたのだから
驚いているのだろう。

沖田は機嫌が良さそうに一歩一歩としながら前を歩く。
隊士達の視線は全く氣にもしていないようだ。
そして、カンナが沖田と共に屯所内を歩いていると、
どこからか異様な殺氣を感じ、それと同時に隊士達はせつせつと逃げ
ていった。

沖田も面倒臭そうな顔をして足早に歩き出す。
カンナはそんな行動の理由も知らないままとにかくついて行く。

すると、後ろから殺氣の持ち主の怒声が響き渡る。

「総司……てめえーどー行つてやがつた!?

「・・・つこわ・・。」

沖田は冷や汗をかいてつぶやき、急にぴたりと止まつた。
カンナは止まつては欲しくなかつた。

怒声は今までに出会つたこともないくらいの怖さだ。
なるべく真つ向から受けたくない・・・そう思つていたのだ。

怒声を発する男から守るように沖田はカンナを自分の背で隠した。完全には隠れきれなかつたのだが……。そしてついに田の前に恐ろしい男がやつてくる。

「せりほり、この手法えぢやつしるじやないですか。
もつし穢やかになつてくださいよ。・・ね、土方副長。」

カンナは初めて知つた。

この恐ろしい男があの土方歳三なのだと。
そして、自分の祖先なのだと。

カンナは震えていた訳ではないのだが、
ついに思つた事を口に出してしまつた。

「はあ・・・・・・・・鬼・・・・かあ。」

「ああー?」

歳三は眉間に皺を寄せ、沖田を避けようとするが沖田は決して避け
ようとはせず、
そのまま笑い出した。

「言われちやいましたね。やつぱり、あんた鬼なんですよ。」

沖田が笑うと、歳三の眉間に皺は消え去つた。
歳三は怒るどころか、苦笑いをして腕組みをする。

「さて、お前の後ろにいる女は誰だ。」

歳三は気づいていない。それとも忘れてしまったのか・・・。

「嫌ですねえ。あんたがこの子を呼んだんでしょうよ。」

沖田が言つて歳三はようやく気づく。

この女は自分が来いと言いつけたあの何処か変わった女なのだと。沖田は、はつとした歳三の様子を見てすっとカンナの前をどいた。すると、確かにあの時の勇敢で歳三に忠実だと物語ついている瞳がそこにあった。

「そうか・・・。すまねえな。」

本気で謝る歳三を見て笑う沖田だが、視線が急に自分へ向かられるとは予想していなかつたらしい。

「だがな、総司。・・・お前は体調も万全じゃねえのにいつたい何処をほつつき歩いてやがった!?」

シヨンとしてカンナに謝っていた歳三の顔は同一人物とは思えないほどに鬼の顔へと変化していた。

しかし、カンナはひとつ確かなことを発見した。

歳三は曲がったことを嫌う性分であり、更に頭も回るらしい。それで、信頼度も高いことだろう。

故に、隊士達はこの歳三が鬼であり、恐れているものであったとし

てもしつかりと

歳三の後についていくのだ。

暫くして沖田への説教がすんだとき、歳三は腕組みをしながらカ
ンナに田を向けた。

「せういやあ、名を聞いていなかつたな。俺は、新選組副長を務め
る土方歳三だ。」

「敢^{かんな}菜です。」

カンナは簡単に名だけを言つ。

そして、カンナは副長室へと案内され、そこで色々と話を聞かれる
事になった。

歳三はといふと、何故この女を呼んでしまつたのだろうかと自分の
行動に疑問を持つた。

今まで女にそこまで興味をそそられなかつた歳三だが、今回だけは
この異人の様な美しい女に
興味を抱いた。

何故この女はこんなにもそじらにいる町娘と雰囲気がかけ離れてい
るのだろうかと。

そして、何のためにこのような線の細い女が刀を手にし、勇敢に戦うのだろう。
どうやって、監察方の隊士を見破り自分に会合の場所を伝えたのだ
らうか。

…………などと、歳三の頭の中は疑問でこっぽいであった。

武士

カンナは、今、あの鬼の部屋ですつと背筋を伸ばし、座ったところだ。

先に座り、カンナの様子を見ていた歳三は、どこか違和感を感じていた。

カンナが自分の左側に刀を静かに置く仕草は本物の武士よりも武士らしい何かがある。

ただの女ではなかつたのか。

「さて、お話・・・とは?」

カンナは歳三の目を真っ直ぐ見て先手を取つた。
歳三もカンナの目を真っ直ぐと見ている・・・といつよりも、睨みつけている。

歳三は見極めているのだ。

カンナが信用できるか出来ないかを。

そして、敵か、味方か。

「お前は、俺に会うために池田屋に居たんだつたな。
どうやつて、潜入した？ あそこはあの日、貸し切りで他人のお前に入れなかつた
はずだ。」

「巻き込まれたのよ。桂小五郎に無理矢理連れていかれたの。」

カンナは、桂の顔を思い出し、深くため息をついた。

もう、祖先だろうが、何だろうが敬語は嫌になってしまった。

「やっぱり居やがったのか。・・・だが、なんだつて敵か味方かわからねえ奴を・・・。」

「・・・ただ、珍しかったんでしょ。私が・・・。」

カンナは結い上げた金色の髪を撫でた。

やはり、この世界で、それも日本で、この姿は異質なのだ。

日本人でもあり、イタリア人もある。

外国を打ち拵おうと言っているこの幕末で、カンナの様なハーフなど居るだろうか。

居るとしたなら、きっと周りからは色々と言われていることだろう。なんだか空気がしんみりとしてしまい、カンナは話を変えた。

「ああ、ところで私ね。今、池田屋の近くにある藤つてお茶屋で働かせてもらってるの。

良かつたら、そのうち寄つてって。私の作る白麺のいじ飯、食べさせてあげる。」

カンナは自然と笑顔になっていた。

少し血の臭いが漂つているけれど、この幕末の世はあまりにも綺麗だから。

それに、少し懐かしい気がするの。この町の雰囲気とか。

カンナはこの時代に来たことを嬉しく思った。

「藤？・・・ああ、あのちいせえ茶屋か。時間があれば、寄ることにする。」

「うん。・・・・あと、私いつでも新選組の力になるから。もし、力が必要になつたら声かけて。」

カンナは新選組が好きだ。

脱藩者や百姓、町人の多い新選組だが、金を稼ごうと考えていうが、お上の役に立とうと考えていよいようが、どちらも同じ。自分にとつて大切な者を守りうとしている。

そういう所が好きだ。

よほど想つていなければ、規律が厳しく、さらに多く危険が伴う新選組には入らないだろう。

一人一人が命をかけて大切な者を守っているから、だから手を貸したいと思う。

輝 き

カンナはあの後、歳三と少し話して、早々と部屋を出た。

未来から来たことを言つたりはしなかった。
知られてもどうにもならない。

ただ、混乱するだけだ。余計な事を聞かれる前にカンナは歳三から離れた。

しかし、わざわざ離れたのも無駄になつた。

「おい、結局お前は何者だ？」

歳三がカンナを追いかけてきたのだ。

「私は……………わからない。
……………ただ、貴方と一緒に戦いたい。貴方の役に立ちたい。」

カンナにとって、歳三はただ一人の信じられる人だった。
親もクラスメイトも誰も信じられなかつた。
だけど、歳三だけは信じられた。

何故かは、自分自身でもわかつてなどいないのだが。

「だからお願い。信じなくてもいいから少し位頼つて。」

わかつてる。矛盾してるつて。
でも、信じろなんて私が言う資格ないの。
だけど、私は誰かに必要とされたい。
今まで、必要にされたことは無かつたから。

カンナの必死な目に歳三は息を大きく吐く。
そして、笑つたのだ。

「何言つてんだ。信じねえか信じるかなんてお前えの行動しだいだ
ろうが。

信じらるる努力をしろ。」

カンナにはわからない。

「努力？・・・？」

「ああ。まずは己がひとを信じねえと始まらねえ。」

そう言つて笑う歳三の顔は清々しくてこれから先の未来は上手くいく
よつて
思えた。

「ありがとう。・・・トシ。」

急に親しく呼ばれ、歳三は少し戸惑つたが、カンナが笑つて歳三を見
ているから
良しとした。

・・・と突然、どこからか明るい声が聞こえた。

『あ、土方さんが女の子くびこむ。』

そして、二人が歳三の背後へと視線を向ければ、そこには、可愛らしき少女が、口笛を吹いて現れた。

「そ、『そんな』ことあるわけないじゃないー。…………は？」

歳三がそんなことはないと否定する前に、カンナがバツサリと完全否定した。

「だつて、トシよ？こんな不器用な男が女の子を口説くなんて信じられないでしょ。

つていうか、それ以前にトシがそんなことしたら気持ち悪い……。」

カンナは本気の顔で言った。

総司は笑いをこらえ、歳三はヒクッと片頬を引きつらせた。
そんな一人の反応にカンナはきょとんと首をかしげる。

その行動が歳三をまた怒らせる。

「誰が・・・気持ち悪いだつてえ？？・・・」

カンナと総司はただならぬ殺意を感じたために急いで走り出した。

それに歳三は大声を上げる。

カンナは声を出して笑った。

何年ぶりだろ？。こんな風に大声で笑ったのは。
すこく気持ちがいい。賑やかで楽しくて、いつまで私は彼らと共に
居られるのだろう。
ずっとこんな風に笑って居られればいいな。
そう思う。

遠くにある三人の男はカンナと総司と歳三の様子を見ていた。

「誰だ？あの子？左之、知ってるかあ？」

「ああ？知らねえよ。」

「・・・にしてもさあ、すつごに綺麗なひとだよなあ・・・。
見たことねえぜ。」

そして、三人は最後までカンナ達の様子を見届けたのだった。

刀

カンナは暫く新選組屯所に留まっていた。

帰ろうと支度をしていた所、一人の男に声を掛けられたのだ。その男は斎藤一といつて、有名な新選組の副長助勤である。カンナの持ち歩く一振りの刀が気になつたらしい。断る理由もなく、仕方ないが刀を見せる事にした。

「はするりと刀を抜きじつくりと目を凝らして柄から切先まで丁寧に見ていぐ。

「かなりの年代物だが、素晴らしい大技物だ。・・・これは・・・兼定か？」

「は、刀一筋ではないのかと思わせるほどに。」

「あたりよ。・・・それにしても見る目があるのね。」

貴方自身の刀、国重も流行してはいないけれどしつかり自分に合つたもの

みたいだし。自分に合つたものを見つけるのは難しいのに。」

一は黙つてしまつ。
しかし、やつと口を開く。

「あなたは、刀が好きか？」

「嫌い。」

カンナの早い応えに一はふつと笑う。
そして、視線で更に深く問いつめてくる。

「・・・刀は・・・人を殺すための道具だから。
それに、刀は綺麗すぎる・・・だから嫌。」

一は何を思ったのかは知らぬが、なにやら顎に手を添えて考え出した。

そんな一を見て、カンナは小さく笑った。

「でも、好きもあるの。」

すると、意味がわからないとしても聞いたそとに眉をひそめる。

「刀は、私を裏切らないでしょ？」

そのカンナの答えに一には似合わぬイタズラ小僧の様な笑みを浮かべた。

同時にカンナの手の平へと刀が戻ってきた。

「俺は齊藤だ。あなたの名は何と申す？」
「敢菜。勇敢の敢に菜の花の菜とかくの。」

本当はカタカナでカンナとかくのだが、この幕末ではカタカナは通じない。

単なる当て字だ。

「敢菜か。覚えておく。」

そう言って一は去ろうとしていたが、カンナはひとつ気になっていた。

「刀が好きかー」と聞いていた彼の目が酷く哀しい物に見えて・・・。どうしてもそれを見ぬふりなど出来るはずも無かつた。

「あなたは？ 刀は好き？」

一は苦しげに目を細め、風の音が聞こえてくるほど静かに言つ。
「気に入らぬ。・・・何もかも。」

カンナは思つた。

彼は私と同じだ。人を信じられず、常に人を疑つて生きている。そして、彼と私の違う所は人を斬つた数。

乱世でずっと過ごしてきた彼は、數えられぬ程の人を斬つてきたことだろう。

自分の感情をどこかにおとして、冷酷にためらいもなく斬る。彼は刀のように鋭くて冷酷なように見えてしまうが、本当は違うのだろう。

感情を心をどこかに忘れてきてしまつただけで。
いつか、本当の彼と向き合つことが出来るのだろうか。
私は向き合つてみたい。

本当の彼は熱く、優しい心の持ち主だとそう、直感しているから。

記憶の言葉

—おかえり—

かつての、そんな一言が私の心を暖かく包んだ。
何処でも聞く当たり前の言葉の響なのに。

何故？

その答えは私に向けられた言葉ではなかつたから。
でも、今のは自分に向けられているもの。

—ただいま—

私はその言葉に応じて当たり前に返した。
自分の口からこの言葉が自然と出たことに驚いた。
自分では経験していくとも、周りの常識が身体に染みついている
のだろう。

この世界に来てからといつも、新鮮な感覚ばかり。
でも、暖かい町の雰囲気は何処か懐かしかった。
どこかに似ている。

・・・・・ああ・・・・・祖父の家だ。

祖父の家に行つたことなど一度しかないが、見渡す限り現代的なら
ルなどが立ち並ぶ

東京の中心部に、ちょこんと寂しく建つていたのを覚えている。

そこだけ、今のような雰囲気があった。

周りの雰囲気が冷たいだけに、その家は暖かく感じた。

しかし、家中には誰の気配もない。家の奥には確かに息をして

床に伏せる

祖父がたつた一人居たのだが。

息絶えそうな祖父が目を向けて寂しそうにため息を吐いた。

祖父が見ていたのは、簡素な部屋に不釣り合いな一振りの刀だった。随分と柄が擦り切れ、汚れてしまってはいたがそれにはただならぬ存在感があった。

同時にここにあるのはおかしいと直感した。

ー持つてゆきなさい・・・ー

祖父は私に刀を託そうとした。

息絶えそうなのに声を必死に出してまでして。

ーお前の父になど託せぬ。・・・それはあの土方歳三の刀・・・
和泉守兼定という大業物だ。ー

驚いた。

土方歳三といえば、有名な新選組の副長で、最後まで指揮官として戦つたすごい人。

そして、世間では悪者扱い。

それは、新政府軍が勝ってしまったから。

最近は新選組に人気が出てきたけれど、それも本やゲームのなかの新選組で、けつして本物ではない。

ー覚えておきなさい。お前は土方歳三の子孫にあたる。誇りをもって生きなさい。ー

子孫？

あてにならない。そう思っていた。
けど、信じざるを得なかつた。

何故かといふと、祖父の家には土方歳三の姉に送つた文や、これはどうかとも思うが、

歳三宛と思われる恋文が山のように押し入れのなかで眠つていた。
勿論、歳三の句集もあつた。そして、刀。
揃いすぎていた。何もかもが。
戸籍だつて頼んで調べて貰つた。その結果は確かに同じで、信じるしか無かつた。

刀は祖父から貰い受け、いつも傍に置いた。学校でも気にせず身近に置いた。

銃刀法違反なんて、無くなつたようなもので、同じように法律も条令も意味をなさなかつた。

私が刀を貰い受けたのは世界が終わるちょうど一年前だつたから。武器でも持たないと外も歩けない。安心できない。そんな狂つた世の中に成り果てていた。

そのうち、学校も停止になつた。

私は家族も飼い猫もお金も大切な物も手放した。けど、剣道だけは、兼定だけは手放さなかつた。

剣道は心の支え。いつも傍にあつた。

剣道は私の身体の一部だから。生きてさえ居れば、必ず私の後につ

いてくる。

だから、生きたいと願つた。

まだ、兼定と共に有りたいと。剣道を手放したくは無いと。

・・・・・ そうだ・・・・・。

ここへ来る寸前、誰かの声が聞こえたんだっけ。

心に響き染みいるような低い男の人の声だった。あそこには誰もいなかつたはず。

・・・ その声を聞いたとき、胸が激しく高鳴つて、何かの残像のような記憶のようなものが頭に流れたんだ。

それは、私の記憶になどないものだつた。

その記憶は残酷なもので、一面が兵と彼らの血で埋め尽くされた。

そんな風景の真ん中でたつた一人の刀を持った男の人立ちはだけていた。

その人は涙を流し、血に染まつた胸に手を当てていた。
悲しさと寂しさ、そして悔しさに満ちた光景。 知らぬ間に私も涙を流していた様な気がする。

—俺はこのよろんな所で死なんつ・・・・・。必ず・・・・・貴方のもとへ・

・・・ 参りますっ・・・・・

その人の瞳にあつたのは純粹な忠義。

そして、もう一つの記憶。

先ほどとは違う男の人で、迫り来る敵を次々と斬り捨て、必死に前

を見て進んでいた気がする。

—俺は・・何のために人を斬つてんだ?・・・もう、守つてやる奴もいねえっていうのによ。—

その人の瞳には怒りと悲しみ。

戦の中で自分の道を見失つてしまつた男の姿だつた。
その姿を見たとき、自然と私の口から誰かの名が出た。
その名が何だったかは全く思い出せないのだが、きっとその人のことだらう。

不思議だつた。

自分の中に全く覚えのない記憶があることに私自身が驚いた。

その記憶とその中の男達の言葉に何の意味があるのか、何を伝えた
いのか

答えは出ないままだ。

2つの星

カンナはある日の早朝、朝餉の支度のため、庭の井戸で水を汲んでいた。

勿論、兼定も共にある。

それにしても、カンナの身体は早起きの生活になかなかついていけない。

身体が石のように重い。

口から出でてくるのはため息ばかりだ。

そんな時、急に誰かに腕を掴まれ引っ張られた。

しかし、そんなことで身を抑えられてしまうほど鈍くはない。

カンナはとっさに身を翻し、利き手ではない左手で刀を抜いた。

カンナは刀を背負うようにして持ち歩くため、どちらの手でも容易に抜くことが出来る。

刀を相手の急所首筋で寸止めした。

しかし、カンナの刀ははじかれた。相手がかろうじて小太刀で抑えたのだ。

・・・この人・・・なかなか。

カンナは面白そうに笑みを漏らした。

「ああ・・・油断してしまいましたねえ・・・。どうか刀をおろして下さいますか?」

相手は苦笑い。

女だからと油斷していたに違いない。

「どうしようかしら。・・・女だからってなめんじゃないわよ。

朝餉の支度を邪魔されて刀まで抜いてこつちは疲れてるんだから。」

カンナは大きくため息を吐いて怒りをあらわにした。

そんなカンナの態度を男は少しばかり恐れた。

女は恐いものだ・・・と。

「・・・申し訳ない・・・実は少しばかり頼み・・・」

男が何かを言うのをやめたとき、遠くから3人ほどの足音が耳についた。

男はばつの悪い様な顔をして庭に入ってきた。

カンナとしては注意をしたいところだが、足音は速さを増し近づいてくる。

カンナはまたもやため息を吐いた。
面倒事が増えたのだから。

「そここの女。綺麗な身なりをした長身の男を見かけては居ないか。」

三人。同じ羽織を身にまとっている。

何処かで見たことのあるものだと思えば……

「確かに、あっちの方だったと思いませんけれど。」

「協力感謝する。失礼。…………馬鹿者ー！早く行くぞ！」

私をじつと見ていた二人に対し、一人の男が早く来いと促した。
全く……私はそんなに妖しい？

それにも……

「あなた、新選組に追われてるのね。」

「ええ。……事情がありまして。」

カンナは先に言つていた頼み事というのが気になつていた。

「……そこで、『何も言わないで。』……」「底いきれなくなる。……あがつて。」

カンナは分かつていた。

この男が長州にとって必要な人物であることくらい。

こんな綺麗な身なりをした男がただの不逞浪士だと思えるだらうか。

カンナはこの男を匿いつことにした。
新選組の敵であるだらうがそんな」とせびりでも良くなつてしまつた。

カンナはただ、己を信じ、真っ直ぐ突き進む者に手を貸す。
敵味方など関係はない。

「私はカンナ。貴方は？」

「私は、通武みちたけともうします。」

カンナはその名を何処かで聞いたことがあった。

誰かの本名であつたはず。

「上の名は？」

男は少し戸惑つたがゆうべと声をだす。

「……ありません。」

嘘。

そんなことは分かり切つてゐる。
しかし、あえて聞かなかつた。
聞いても、悪いことしか起こらない。じきに悪い出せるだろ？
それをまつしかない。

それにしても正直な男だ。

嘘も簡単につけない。そんなんで、この時代を生きていけるのか。
でも、正直な人は嫌いじゃない。
むしろ興味がある。それで何処まで行けるのか。

「しつかり働いてよ。最近は人手が足りないらしいの。」

通武はかつさんにも受け入れられ、なんとかここで暫く過ぐせりようになつた。
よく働いた。その仕事っぷりには私もかつさんも驚いた。
そして、ときどき彼は句や短歌を詠む。
そのときの声は澄んでいてとてもきれいだった。
そんな彼をかつさんは気に入っていた。

私も結構気に入っていると思う。特に彼の純粋さや優しさは私にと

つて眩しいものでしか
なく、近くにいるだけで自分も輝くがする。

そして、ある日私がおつかいから帰れば、眩しい笑顔で通武は迎えてくれた。

そこには、かつさんの笑顔もあって前よりもより暖かく感じた。

— おかえりなさい。 — — おかえり。 —

その声が一つある。

それだけなのに妙に嬉しかった。

私はもうふたりを家族のように思い始めていた。

そんな自分に少しばかり違和感を感じたが、この暖かい場所に居たいがために

それを無視する。

そして笑顔で返す。

— ただいま。 —

私が新選組の屯所を訪れてから早六日。この時代に来てからも随分経つた。

それにしてももうじつ夕飯時だからお密はだんだんと増えてきている。

6円といつものあつて京の町は夏の気候になり始め、仕事もきつな。

「 いじりしちゃこませー。 」「 めおめろ。 」

私たちの元氣な声がお店に響く。

それはとても気持ちがよい。バイトなんでものはたつたの一度もしたことはないから働きがいがあるといつひどがこんなにも楽しい事だけは知らなかつた。

「邪魔するや。」

お店に訪れたのは3人の男性客。

皆若い方だったが、特に小柄な方は少年の様な明るさと無邪気さがあつた。

そのお客様が席について一息吐いたのを確認してから注文を取る。それは常識。

まずはお店の雰囲気に慣れてくつろいで貰わなければ。

「いらっしゃいませ。」注文はどうなさいますか？」

「……んー……あんたのお薦めで頼む。」

「俺も！」

「同じの頼む。」

この店は初めてのお客だ。

最高においしいものをお出ししたい。

それでもって、口に合う物を。それがかつさんのモットー。

そんな細かい気遣いがあるからこそ常連客も多い。

「あの、つかぬことをお聞きしますが出身は……

こう言ったとき、たいていの人は私を疑う。

長州や薩摩、土佐の人なんかは特に。

「……ん? 出身か? ……伊予だが……」

「俺は松前だ。」

「俺は・・・江戸。」

「わかりました。では、少々お待ち下さい。」

私は早くつべつてしまわねばと急いでいた。

「なあ、あんた、もしかしてこの前新選組の屯所に行つてなかつたか？」

その時は急いでいたから答えるヒマも無かつた。

そうだと言つようになつたつもりだ。

近くには通武もいたから言つてしまつたら誤解を招く気がした。

「どうですか？ 敢菜さん、もうできますか。」

「ええ。今できたわ。通武さんはあの常連さんに持つていって。」

念のため、通武はあの3人の客から遠ざけた。

同じ長州や薩摩関連の人の可能性もあるけど、新選組の可能性だつてある。

なんだかんだいっても、私は通武を手放したく無いのかも知れない。

「お待たせしました。私のお薦めでよろしくですね。」

「ああ。・・・おっ。うまいそうだな。」

「そういえば、この人はよく見ると駄前かもしれない。
それに、槍を持つてる。」

私は槍にも結構興味がある。

・・・確かに、新選組だとすれば十番隊組長の原田左之助が当てはまる。

出身が伊予で槍術を使つて。

「うわっ。うまい・・・。」

少年が一言漏らしているのを聞いて私は嬉しくなった。
ここで「飯を作っているとたくさん的人がおいしいと言つてくれる。
それは今までにない感覚だ。」

「これはうめえ。食つたことのない味だがしつくづくる。」

おかしい・・・。

間違えてしまつただろうか。

この人は松前の出身では？松前の味付けで出したはずだ。

「申し訳ありません。松前の味付けのはずが・・・。」

「ん？あつ・いや・・・・そういうわけじゃあねえんだ。」

どういう訳であらうか・・・。

間違つて」いるのならば、ハツキリといつてほしい。

「そうだな。」二つの場合、生まれは松前だが、育ちはほととぎ江戸だからな。

気にするこたあねえと思つぜ。」

原田左之助っぽい人がそう言つ。

・・・そうだつたか・・・。

今度からは育ちは何処かと聞かなければいけないかもしねない。

「そうかあ・・・」これが松前の味か・・・。」

しみじみと独り言を言つているのを聞いていると、私も北海道の街並みが少しだけ恋しく感じる。まだ平和だった頃の街並みだ。

「それにしたって、ここは良い店だな。繁盛してゐるのも分かる。」

「ほんとやうだよなあ！江戸の飯なんて久しぶりに食つたぜ。ちよ
うど京の飯には
飽きてたんだよ。」

「つまかつた。またよろしくな。」

なんとか喜んでもらえたようだ。

少し勘違いはあつたものの、松前の味は口に合つたようだ。

「はい。またいらして下さいね。」

「おー。・・・やうこや、やうきの質問には答えてくれねえのか？」

「うわあ、やうきの笑みでは分からなかつたらしい。
どうあるべきか・・・。」

「貴方は、新選組の組長さん？」

まずはここから。ぐたに言つてしまつと後がきつくなる。
じかりとしても向ひうつとしても慎重にことを進めるのがいい。

「ああ。・・・やうだが。」

「原田左之助さん・・・とか？」

「あたりだな。・・・・でっ。」

「うつしても答えを聞きたい・・。
そんな顔をしていろ。」

「・・・土方さんと沖田さんと斎藤さんは元気? それから、山崎さんも。」

山崎さんは一度しか会っていない。

池田屋の前で一度伝令として会つたつせつ。

原田さんは笑つた。

それはもう無邪気に。

何が面白いのかは知らないけれど。

「あんた、とんだ変わり者だな。鬼副長と新選組一、一の剣客と恐
れられる総司と斎藤なんかとこわがらえで付き合つなんて、そこの
男でもなかなか出来ねえぜ。」

「やっぱりあの時の子なのか!」

「俺でもあの鬼副長と関わるのはゴメンだ・・・。」

新選組の中でもみんなに恐れられていたなんて驚きだ。
土方さんは不器用だけど優しい普通の男だと思つただけど。
沖田さんだって、性格は子どもっぽくて憎めない。

斎藤さんも一見冷たいように見えるけど仲間思いなところがある。仲間思いなひとが悪い人なわけはない。

「優しい人よ。そつそつ、疲れてるみたいだったから時々休ませてね。

それと、沖田さんにもお大事について伝えて。」

「ははっ。かみさんみたいだな。」

「そうなのか？・・・

私には親なんていないうんなものだつたから分からない。

「あと、土方さんと斎藤さんは一度お店に来てって伝えておいて。」

使いつ走りみたいだけど、きつと「ワードニケーション」を取るきっかけにもなる・・・はず。

山崎さんはいつものように来てくれてるし。（多分監視でも頼まれてるのだと想うけど。）

沖田さんは暫く養生の箒だから来てなんて言えないし。

急に面づのものだから少し対応出来ないで居た。

「わかつた。しつかり伝えとくから安心じゅよ。・・・あと、俺は原田左之助だ。」

「俺は藤堂平助！」

「永倉新八だ。また、松前の味、頼むな。」

原田さんは何となくで分かつたけれど、他の二人も幹部だったんだ。
・・。

・・・藤堂さんって・・こんなに若かったんだ・・。

「私は敢菜です。伊予の原田さんに、江戸の藤堂さん、それから松前と江戸の永倉さん
ですね。また、いらっしゃってください。」

3人は勘定を払つて帰つていつた。

なんだか、3人ともご機嫌で・・・。

そんな後ろ姿を見ていると、私自身の気分もすゞく良く感じた。

一の俊才

あつという間に月日が経ち、七月の早朝カンナは縁側でお茶を手に何かを深く考えていた。

「はあ・・・・・。どうしよ・・・・。」

「敢菜さん? どうなさいたんですか?」

隣で同じようく茶を飲む通武も心配してカンナの顔をのぞき込む。カンナも通武の顔を見つめる。

すると通武は急に困った顔をして瞳を潤わせた。
そしてふいっと顔を逸らしてしまつ。

カンナはそんな通武を可愛らしく愛しく思つた。

通武は大人だが子どもだ。

いつもは大人びた優しい笑顔を見せるのに、時折、子どものように照れたり、

カンナが意地悪をしてみれば、頬をほんのり赤らめてふくれる・・・
と思えば、

急に無邪気に笑つてみたり、ただの遊びに夢中になつてみたり。
確実にカンナよりも年上ではあるのだが、どうもそつとは思えない。

「・・・・通武つてさ、剣術出来るわよね。」

「は?・・・・ええ、まあ・・・。」

「それなら、ちょっと付き合つてよ。腕なまつちやつてるから。」

カンナの悩みはこれだった。

最近は店が忙しくて鍛錬も出来ないのだ。
腕も鈍る。

「よりこんでお付き合つて致しますよ。せつかくの、休業日ですから
ね。」

カンナたちは竹刀を持たないために、庭で真剣を構えた。

「ねえ、・・・私さ、貴方の本名まだ知らないの。」

通武は動搖しているのか瞳を揺らしている。

カンナは知りたかった。

正体を知つてどうこういう訳ではない。

ただ純粹に信用されているという証が欲しかった。

通武がどんな人物だとしても追い出そうとは思わない。
どんな人物でも、通武は今まで一緒に過ごしてきた家族だ。
何があつても守りたい。

「・・・それは・・・」

「私は信用ない？」

「そんなことはつ・・・」

「じゃあ、教えて・・・私も教えてあげる。」

「・・・え？・・・なぜ・・・」

何故女である私が偽名を使つてゐるか？

・・・それは、私自身、この時代に生きてはいけない人間だから。
だから、未来には居ない架空の人物にならうとした。
まずは名前だけでも。

「私は・・・土方カンナ。カンナは漢字じゃなくてカタカナなの。」

すこし、不安だつた。

土方といつ名字はそいついるもんぢやないし、土方歳三は有名だから。

親戚かと思われるかも。

でも、信じてみようと思った。通武が私を拒絶するはずないって。

「・・・カンナさんは私を信用してくださつた・・・こんな私を。」

「

通武は願つた通り拒絶なんてしなかつた。
だつて、優しく嬉しそうに笑つてる。

「私もお教えします。・・・私は、・・・

私は・・・ 久坂玄瑞 と申します。・・・

ああ・・・ そうだった。

通武という名は久坂玄瑞の改名前の名だった。
ずっと思い出せないでいたけれど。

「 そう。・・・ ありがとうございます。 信用してくれて。 貴方は、もう私の家族。

「え?・・・ 驚かないのですか?」

「うん。なんとなく、そこら辺の人だろうな・・とは思っていたか
ら。」

玄瑞は困ったよじに笑つた。

「では、今一度、参ります。」

カンナは急に地を蹴つた。

あつという間に玄瑞の正面まで来てしまう。

「なつ！・・・くつ」

さすが長州一の俊才・・・久坂玄瑞。

どんなに不意打ちでもすぐに反応して防いでくる。

「ふふつ。やばい！・・・楽しいかもつ！」

剣術を楽しいと思ったのは久しぶりだ。

この時代に来てからは本当に人斬りばかりで、正直きつかった。
重かつた。たつた一人の命がこんなにも重く儂いものだと初めて知
つた。

家族の大切さも初めて知つた。

初めてが多すぎて頭がついていかないけれど、確かなのは、前よりも幸せだつて事。

笑つていられるつて事。

「ふつ・・・・・・・カンナさんはお強い！誠に女子で『ざこましょ
うかー？』

玄瑞は笑つてる。
私も笑つてる。

「失礼ね！そのうつちつ・・・強い女が流行るわよー！」

「そりでしょうかー？」

庭で刀がぶつかり合う音が心地よく響く。

結局、決着は付かなかつた。

でも、やつぱり私が押されていた時間が方が長かつたと思つ。

「はあ・・・つかれたあ・・・。」

「やつですね。それにしても、カンナさんがこれほどまでは思ひもしませんでした。」

「女は馬鹿に出来ないね。」

「ははっ。ええ。やつですねえ。気を付けましょ。」

庭で打ち合つたのはいいが、刀のぶつかり合つ音に、かつさんガ物騒だと言つて

一人して子どものように叱られてしまつた。

でも、気持ちがよかつた。

誰かと汗を流して、叱られて、笑い合つて。
私は幸せな時間を過ごしていた。

しかし、私はどうして気が付かなかつたんだろう。

玄瑞にだんだんと近づいてくる悪魔の足音に。

いつまでも幸せは続かないととっくに分かっているはずなのよ。

私は、守りたかつただけだ。
大切な、かけがえのない家族を。

七月十八日 夕方

「では、カンナさん。行つてきます。」

「うん。楽しんできて。久しぶりに親友に会つのでしょうか？」

「はい。」

笑つて返事はするものの、嬉しそうではない。
むしろ、通武の笑顔は何処か悲しみを帯びていた。
もう既に、このとき、おかしいとは思つていたのだ。
しかし、今までの生活が幸せすぎて、平和すぎて、気持ちが緩んで
いた。

そのため、本来気付くであらうことに気付けなかつた。

「行つてらつしゃい。」

「近いうちに戻ります。・・・行つてきます。」

何故、手を振つてしまつたのだろう。

このとき、無理にでも引き留めていれば・・・。

何時だつただろうか。

七月一九日の早朝だつた。

私は、珍しく自然と目が覚め、寝着のまま縁側へ出て薄暗い空を見上げた。

心の中がざわついて、どうにも落ち着かないのだ。

私は刀を抱きしめ、頬をすり寄せた。

その時、どこからともなく何かの大きな音が鳴り響いた。

カンナはその音の正体を掴むまで少々時間がかかつたが、風に乗つて漂う火薬の匂いと

久しぶりに嗅ぐ、生々しい血の臭いにその正体をだいたいだが、掴んだ。

それと共に、どうしようもない不安がこみ上げ、早く行かなればと身体が先に動く。

何故なのかは分からぬ。

ただ、何か大切なものがこの世からすと消えていつてしまつよつ
な、そんな感じがした。

カンナは着物に素早く着替え、刀を背にくくりつけ、かつさんの反
対を押し切つてまで駆けだした。

私には正直、何が起つてゐるのか、この足が何処に進んでゐるの
か全く検討が付かない。

それに未だ京の都に慣れない私にはこここの地理などさうぱりな筈で。
考えなければ・・・・。

・・・えつと・・今は元治元年の七月一九日・・早朝・・
それから・・・大砲・・・ああつ・・・もつ少しで出できやう・・・
・・・・・。
・・・あ・・・玄瑞は、どうじてゐ?・・・あれ?・・玄・・瑞?
あつつ!・!

「・・・・つ禁門の・・変!」

だとすれば、玄瑞が・・!

早く!・・・早くつ!・!

だんだんと男達の必死に生きよつとするつめき声や、刀のぶつかり
合つ音、それから、

先ほどと同じ、大砲の音が大きくなつてきた。
どうやら、この足に全てを任せて良いらしい。

しかし、やはり、この足では速さに限界があつた。

ようやくここまでたどり着いたは良いけれど、もう日が昇りさんさ
んと太陽が武士達を照らし付けていた。まだ間に合つか!?

・・とにかく私は玄瑞・・いや・・通武のもとへ行きたい。

久坂玄瑞・・確か、鷹司邸へ行けば会えるはず。

・・・・！」

カンナは立ち向かう者全てを切り伏せ、無事に鷹司邸にたどり着く。

・・・・？」

・・・・気配がするかも・・。

カンナは思つままに足を進めた。

カンナは敵に出会つことも、斬り合いになることも恐れはしなかつた。

しかし、一つだけ恐れていることがある。

・・・どうか無事でいて欲しい。

それだけがカンナの頭の中を占めていた。

この向こうにいる。

カンナは直感した。

ただ、会いたいがためにカンナは勢いよく襖を開けた。

すると、カンナの直感が当たつていたようで、通武はその部屋のど

真ん中にいた。

しかし・・・

通武は既に、ぐったりとしていて、通武の座る床には血が水たまりのように広がっている。

血の量にも驚いたが、まだまだその血は止めどなく流れ、いつそく水たまりを広げていた。

「通武っつーーー！」

カンナは血で汚れるのも気にせず、通武に駆け寄り抱き起した。やはり、切腹だった。

歴史はそう簡単には変わらないものだ。

最初から決まっていたことのように人が傷つき死んでいく。自分の無力さに腹が立つた。

「・・・っ通・・武え！・・通武っつーーー！」

カンナははとつて通武の腹に刺さる小刀」と傷口をおおえ、何度も近づいてその名を呼んだ。近くにいるのだからわかる。

微かにでも息はあるのだ。しかし、夏であるところに、通武の指先やつま先は氷のようになくなってしまった。冷たくなってきていた。

「ねえ・・。通武・・・・。お願い・・生きとよ。」

「……………カンナ……………ビウヒー……………」のよ
うな・・とこ・・ろに。」

微かに通武の声がした。

驚きよりもまだ生きていることへの嬉しさの方が勝っていた。

「通武つーーー！」

「ははつ・・・・そんなんに・・・・叫ば・・なく・ともつ・・・。」

「どうして?・・・切腹なんて。」

いつの間にか、カンナの目には涙がうつすりと滲んでいた。

「私は・・武・・士・・ですから・・・。」

武士なんて身分、どうでも良かつた。
切腹なんて、ただの自殺では無いのか・・・。

「家族なのにつーーー大切なにつーーー！」

「カンナ・・さん・・。どうか・・笑つて・・いて・・・ぐださい。
・・泣かないで・・ぐださい。」

気付かぬ内に涙が溢れ、通武の頬まで濡らしていた。
笑えと言われても、カンナには無理なお願いだ。
この状況で、笑えというのか?

「ひむをつーーー。生きていれば、笑顔など何時だって・・・。」

「ははっ・・・。そうです・・ね。・・生き・・うるる・・でしおうか？」

カンナは大きく頷いた。
諦めて欲しくなかつた。しかし、分かつてはいたのだ。もう手遅れだ
ということを。

だから、こんなにも涙が溢れる。

「・・・最期に・・・カンナ・・さん・・・」

「最期じゃないっ！！」

通武は穏やかな笑みを漏らした。

「聞いて・・・くだ・・さい。」

そう言われてしまつては、黙るしかない。

カンナは溢れる涙を止めようとせはせず、黙り込んだ。

「・・・つ・・・カンナ・・・。・・私は・・・貴方が・・・好き・・
です・・。

貴方の・・・笑顔が・・・言葉が・・・私を・・・闇・・から・・
引きずりだして・・・くれた。

・・・幸せ・・・でした・・・・・初めて・・人を・・愛し、過ごすこと
が・・・・・幸せ・・・だと知りまし・・た。・・・本当に・・感謝して
も・・・しきれぬ・・・ようで・・・。」

カンナの目には先ほどとは比にならぬほど涙をためてこる。

・・・・・通武・・・・・

生きてよ。死なないでよ。

家族でしょう？・・・「」の先生きていれば、・・・わかつたたくさんのが幸せを知れるんだよ？

「通・・武え・・・」

「泣かないで・・・と・・・言つた・・・でしょう。」

涙を止める方法なんて・・・知るわけないでしょ？

「生きて・・・置いていかないで・・・」

通武はふっと笑い、冷たくて大きい手でカンナの頬を優しく包んだ。

「カンナ・・・良いですか・・・？・・・よく・・・聞いて・ぐださい・・・。
・・・早く・・・ここを出て・・・かつさん・・・と・・・安全な・・・といひ・・・ぐ。
・・・京は・・・焼かれて・・・しまい・・・ます・・・。」
「無理にきまつて・・・」

「カンナっ！・・・時間が・・・ないんです・・・・・私を・・・捨てて・・・
・・・いきなさい！
・・・早く・・・早くっつ！――」

いつの間にか駆けだしていた。

でも、通武は傍にいない。

通武の必死な声に突き動かされた。

・・・・・私は・・通武を・・・捨てた。

最低だ。

家族といえるまでに、愛していたのに。大切だったのに。

ただただ、走った。

泣きながら必死に走った。

自分の侵した罪から逃げるように。

通武の死を認めまいと。否定したかった。

帰ればまた、あの穏やかな顔で笑いかけてくれる。

そう、信じたかった。

カンナさん。・・・。どうか、どうか・・・。幸せに生きて下せ。誰にも負けぬぐらご・・・。

久坂玄瑞・・・通武は静かにこの世を去つた。
通武は、一人で死んでいった。

しかし、カンナが去るとき、通武はカンナにある冊子を託した。
その中には、今までに詠んできた句と切腹の前に詠んだ辞世の句が
綴られている。

通武は息を引き取る前、あることに気付いたのだと云つ。

「・・・ああ・・・カンナさん、私は忘れていたよつです。
・・私は決して、一人ではないといつことを。愛
しい、家族が居ることを。」

そして、通武が一番に願つたこと。

一カンナさん、必ずや・・・幸せに生きて下せ。・・・やの悔いな

ど、
ありはしません。

カンナさん。

本当に・・・大好きでした。|

カンナは何も考えずにただ、足の向く方へと走っていた。
しかし、カンナの頭の中では通武の声が響き続けていた。
今までの生活の中で触れてきた通武の暖かい言葉や仕草がとても恋
しく感じていた。

「カンナさん、私は決めました。・・・私は、貴方という家族を守
るために
この剣をふるいます。」

そう言つた通武の顔には嬉しそうな笑顔があつて、子びもらしさが
あつて、
本気で言つてくれていることが嬉しかった。

「初めて、大切だと思える人が出来たんです。全力で、守らせて下
さいっ。」

もともと、カンナと通武は似たようなものだった。
愛を知らず、幸せを知らず、何もない道を歩いてきた。
しかし、カンナはこの時代に来たことで、幸せを知った。
通武はカンナに出会つたことで愛を知った。

「カンナさん、愛しています。」

この言葉が、通武のカンナに対する精一杯の愛だった。
早く行きなさいときつく言つたのも、愛だった。

通武の起こす行動、言葉全てが愛の塊で、暖かかった。

カンナは知った。

こんなにも人に愛されていたのだと。

愛する者がこの世から消えていつてしまつのがこんなにも哀しく寂しいのだと。

どれぐらい走つただろうか。

戦場と家を走つて往復するのにはさすがのカンナでも無理があつた。カンナの足は道を教えてくれるもの、疲れてしまえば全くの役立たずだ。

カンナは休むしか無かつた。

どんなにまた走り出そうとしても、全く足が動いてくれず、林の中で倒れるように腰を下ろした。

マラソンどころの疲れではなかつた。

口の中には鉄のような味が広がつている。

着物であるため、身体は重く、暑く、動きにくかつた。

辺りには、水もなく、下手をすれば熱中症になりそうだ。

暫くして、カンナは走り出した。

ずっと休んでいるわけにはいかなかつた。

通武が望んでいるのは、カンナとかつの安全であり、また、

カンナはもう大切な家族をなくしたくはなかった。
京が燃える・・・。

かつは無事であろうか。

通武はそう言つていた。カンナの知る歴史でもそくなつていた。

カンナの頭の中には通武の笑顔とかつての笑顔が浮かんでいた。

あの輝くような笑顔を見れなくなつてしまつのは愛を知つたカンナ
にとつて
絶望的だ。

カンナは町に近づいていたのだと知つた。

それは、ある意味悲しいことでもあつた。

焦げ臭い匂いが鼻についている。京が燃えているのだ。

この焦げ臭い匂いが町に近づいているという事を知らせたのだ。

カンナは焦つた。

通武だけではなく、かつも失つてしまうのかと。

カンナはほんの少しの生きているといつ望みを持つて、わずかな力を振り絞り走つた。

町に着き、かつての店へと向かつたはいいのだが、
向かう途中の店や家は炎に包まれ、じごじごと恐ろしい音を立てて

いた。

道には、大火傷をし、転がっている者も少なくない。
店は、無事だろうか。

かつは生きているだろうか。怪我を負つてはいないだろうか。
そんな心配ばかりがだんだんと募つていく。

途中、ちらちらと通武が心配になつたが、かつも心配だった。

どこもかしこも赤い風景ばかりで悪い事ばかりを考えてしまう。
道には、無傷の人もわりと居て、水で火を消している。
かつも火を消している。きっとそうだと思ったかつた。

しかし、それは、現実にはならなかつた。

カンナが店に着いたとき、カンナは一瞬頭が真っ白になつた。
店はもう、完全に炎の餌食になつっていた。

店の前には、店の火を消している人は居るが、その中にかつ姿は
無かつた。

「あのつつ……」の店主は！？・・つかさんは何処ですか
つつつ……」

「かつさんはまだこの中らしつつ……もうつ・・駄目かもしけねえ
つ……」

カンナはとつさに着物を脱ぎ捨て、襦袢一枚のまま水をかぶつた。
そして、刀を持ち炎に立ち向かつ。

「嬢ちゃん！！危ねえつ……もう無理だつ……」

せつぱう火消しの腕を振り払つて中に入った。

カンナは諦めきれなかつた。

かつならば、まだ生きているのではないかと思つたのだ。

燃える店の中は思った異常に熱く、長い時間耐えられるものではなかつた。

天井から落してくる瓦礫も赤々と燃えていて、当たれば命はない。店の奥へと進んでいくと、ある部屋の棚の前にかつは倒れていた。しかし、カンナとかつの間には、念のを許さぬとでも言つように炎の壁が立ちはだかっていた。

しかし、カンナは氣にもとめず、その壁を通り抜けた。水を含んだ襦袢がカンナを守つたのだ。

「かつせんー？・・・かつせんー」

カンナは煙を吸い込みぬように手のひらで口と鼻を覆い、かつの近くへと行つた。

煙を吸い込んで身体が動かなくなつてしまつたらしい。意識はあつた。

「・・・敢菜ちゃん？・・・何しとるの？・・・早ついにから出んと・・・」

「はーー・・・行きましょーーー！」

カンナがかつの身体を支えて立ち上がろうとしたが、その時、
カンナたちの頭上から運の悪いことに大きな瓦礫が音を立てて落下
してきた。

カンナはそれにすぐ反応できず、それでもとにかくかつを連れて避けなければと足に力を入れた。

しかし、走り続けてきたカンナの足にはそのような力は残つていなく、動けなかつた。

そして、瓦礫が目の前に来たとき、何故か急に後ろに倒れてしまった。

まるで・・・誰かに突き飛ばされたように・・・。

カンナは暫く理解できずにいた。

かつがカンナを助けるために無理矢理最後の力で突き飛ばしたのだ。
そして、瓦礫が床に落ちる大きな音がした。

「・・・かつ・・・せん？　・・・かつせんつ？」

呼んでも呼んでも返事は有るはずがなく、カンナは無意識に燃える瓦礫を掴み、瓦礫をどけようとした。

しかし、瓦礫は燃えていてカンナの手はあつという間に火傷で皮膚が焼けただれてしまつた。

カンナはそんな手を見つめた。

・・・何もない・・・何もかも、なくしてしまつた・・。

自分の中から怒りがこみ上げてくるのがわかる。

この時代に、火を放つた奴等に、そして家族を守れなかつた自分に腹が立つた。

カンナは刀を片手に炎をぐぐり、店を出た。

体中が熱い・・・。

目が熱い・・・涙が・・・熱い。

カンナはまた走り出した。

自分でも何処へ行くのか解らないでいた。

ずっと走っていると、見えてきたのは数人の男。

何故か、確信した。

この男達が京に火を放ったのだと。

そう思うと、更に怒りが増した。もう自分では制御出来なかつた。

「ああああああっつーー！」

カンナは一人の男を一撃で斬り倒し、そして、二人目の男を同じ刀で斬り上げる。

カンナはただ自分の想いに、自然に動く体に全て任せ、斬る事だけに目がいつていた。

辺りには血の痕が残り、カンナをも赤く染めていた。

何人斬ったのか覚えていない。

しかし、カンナの氣がおさまった時、カンナの周りには八人の男が血を流し転がっていた。

カンナの涙はおさまることが無かつた。

仇を討つても、何も変わらなかつた。悔しさも、悲しきも余計に増した。

カンナ自身にはこの気持ちをどうすれば良いのか全く分からず、
ただ、赤く染まつた地の真ん中に崩れ落ち、泣き叫ぶことしか出来
ずにいた。

手

俺たち新選組は援軍として戦場に放り込まれた。

幕府から直々に命が下るなんて事は今までに無かつた。

名誉なことだと誰かが言つた。

だが、俺にとっちゃ、そんなことは名誉な事じゃがない。

ただ、戦う駒として適当に放り込まれた・・・。

そうとしかおもえねえ。

俺たちは敵を追つて天王山に来たが、やつと追いついたと思えば、奴等は皆切腹して、既に果てていた。

何とも哀しいものだと思う。

こいつらにも、家族は居たのだろう。愛する者もいたのだろう。

・・・上の奴等がこれを見たら、見事だつて言うんだろうな。

だが、俺にはそんな事言えっこねえ。

それは、俺が本物の武士じやねえからか？根つから百姓だからか？

・・・戦なんてもんは哀しいもんでしかねえんだ。

戦に勝つて喜ぶ奴は、どうにかしてんだ。勝つたって、何人もの人間が犠牲になつて

死んでる。戦自体、喜べる事じやねえんだよ。

俺たちは天王山で京が火の海になつているところを聞き、

すぐ町までおりた。

しかし、到着した頃には炎が広範囲に回り、火を消すのにも手が足りていなかった。

「おめえらー！！火い消せ！！！早くしろ！！！」

『はい！！！！』

俺は隊士全員に命令し、俺自身も火を消しに向かった。そんな時、ある女の顔が頭の中をかすめた。

あの女は変わった奴だった。

異人のようだが、日本人のようでもあって、そして、女の身で自ら戦に突っ込んでいく。

さらには、この俺を怖くないとも言つちまた。

笑顔は本当に美しかったが、何処か哀しそうな顔をしている奴で、寂しそうで・・・。

「副長！あっちも火がやばい。あっちの方頼むぜ！！」

原田が俺にあっちを頼むと言つてきた。

ああ・・・あっちは、あの女の働いている店があつたか。そんなことを思い出すと、何故か酷く心配になつた。全くと言つて良いほど面識が無いというのに。

俺はその店の方向へと向かおうとした。

「土方さんつ！僕も手伝います！」

総司が手を貸すと言つてくれてとても助かつた。

火を消すのにも、一人ではさすがに難しそうだ。

俺と総司はその店の方へと走った。

店へ着くと、店は酷く燃え、店の前には火を消そうとする一人の男が居た。

「おーーー」の店の奴は！？

「店主はもう無理だ！…さつきの…金色の髪した嬢ちゃんは泣きながら走つていつちまつた！…」

・・金色の髪・・。敢菜しかいねえ。

「どつち行つた！？」

「あつちだ！…！」

俺はすぐに駆けた。

本当は火を消すのが俺の仕事だった筈だが。総司も後から付いてきた。

「土方さん！…もしかして、敢菜ちゃんですか！？」

「ああつー！」

総司もそれに気付くと、目の色をかえ、走る速度を上げた。

ただ、あの男の言った方向へ走つてゐると、急に総司が足を止めた。

「土方さん……あれって……。」

総司が遠くを見て言つた。

俺も目を凝らしてその方向を見た。
誰かが人を斬つている。

「……っ敢菜だ！……」

俺はとにかく敢菜を止めたくて走つた。

ある程度近くまで行くと、止める事など出来ないと悟つた。
総司も息を呑んだ。

敢菜は八人の敵を相手に一人で戦つているのだ。
そして、既に五人の死体が彼女の回りにあつた。
思わず足を止めた。

俺は見入つた。なんて、哀しい顔をしているんだろう。ただそう思つた。

彼女の目から溢れる涙は綺麗で、熱くて、哀しくて胸が痛んだ。

俺たちは敢菜を見ていることしか出来なかつた。

彼女は強い。だが、弱い。剣の腕は良い。しかし、心は弱い。

強そうに見えるのだが、そういう奴こそ、心は折れやすかつたりする。

今の敢菜は悲しみ泣く獣のようで、それでもって、美しさは健在で。俺が泣きそうになつた。

敢菜はあつという間に八人全員の息の根を止めた。
その後、ひざから崩れ落ちた。

敢て泣き叫ぶ声が耳に残った。

そんな彼女を俺はどうにかしてやりたかった。

何を分からぬ

總司は訳が分からぬと書ひよひて立ち廻へしといふ。

しかし、助けたいと思つた

「敢菜」

俺は敢菜の名を呼んだ。

すると彼女はゆっくりと顔を上げた。

その顔はどれだけ泣いたのだ?と思うほど赤くなっていて、未だ涙が溢れていた。

頬には血もはねていた。

俺は涙と一緒にその血もぬべつた。

「と・・・し・・・?・・・つ」

「ああ・・・。」

細くてか弱い声に涙が出そうになる。

だが、こらえた。男が泣くなんて情けねえ。

俺はなるべく優しく敢菜を抱きしめた。

彼女の着物は酷く濡れていった。・・・よく見てみれば、こいつ・・・

襦袢一枚じゃねえか？

俺は一度離れ、新選組の羽織を掛けてやつた。

夏といえども、今は夜だ。

しかも濡れでいるときた。寒いに決まってる。

俺は立ち上がりつつと手を差し出した。

敢菜は首を傾げて俺の目を見た。

「敢菜。・・・新選組に・・俺んどこに来るか？」

自分の口からこんな言葉が出てくるとは思わなかつた。
女人禁制だつてのに・・どうすんだ？

カンナは暫く俺の顔と手を交互に見ていたが、決心したように頷いた。

「・・・つうん・・・。」

そして、震える手で俺の手を取った。
その時、俺はすごく安心したんだ。
なぜだかわからねえが。

敢菜の手の平は腫れぼつたく、熱を持っていた。

「帰るぞ。・・・手当してやる。」

敢菜はまた首を傾げた。

「・・・手。火傷してんだろ。」

「・・・つ・・・・あり・・・がと・・・・。」

「おう・・・。」

敢菜の手の火傷を気遣い、肩を抱いて歩いて屯所へ帰った。
彼女は屯所に着いても涙を流したままで、俺は改めて彼女の心の傷
が深いことを知った。

さあ・・どうするか・・・。

俺に、いったい、何が出来るってんだ?

ああ・・・。

・・・まあ・・・とりあえずは手当が先だ。

敢菜を泣きやませるのも、敢菜と話すのもその後だ。

それでいいだろ？

唯一の・・・

トシが私に手を差しのべてきた。

「敢菜。・・・新選組に・・・俺んどこにいくるか？」

絶望に陥り、行き先真っ暗な私にとつて、奇跡の救いの手だつた。
迷わずに手を取つた。

一人になりたくないて、先に進みたくて私はその手に縋り付いた。

「手当にしてやる。」

そう言つうトシは鬼なんかじやなくて、
誰よりも優しくて暖かい神のような存在に思えた。
こんなに醜く、傷ついた面倒な私を救つてくれた。
本当は死んでしまおうと思つた。
でも、そんな時、通武の言葉とかつさんのあの顔を思い出してしまつた。

「生きて下さい。」と言つたのだ。

そして、かつさんは瓦礫の下敷きになる寸前私に笑いかけていた。
嘘のない、後悔もない、純粹な笑顔だった。
だから、そう簡単に死ねるはずもなく、
通武とかつさんが時間を稼いでいたようにトシが現れた。
タイミングの良いものだと思つ。
まだ死ぬなど通武とかつさんが言つてくれているようで、余計に涙
が出た。

でも、生きていることは今の私にとつて苦しいものでしか無くて、

それでも死ねなくて、私は生きのびている。

「敢菜。手え出せ。」

トシは、火傷の手当までしてくれると。外は大変な事になつていてるといふのに、こんな所で時間をくつてしまつていいくのか？

「トシ・・・自分で・・・出来るよ・・・。」

「馬鹿野郎。両手だらうが。大人しくしどけ。」

無理矢理腕を掴まれ、前でトシの手によつて固定された。火傷の部分を水で一度洗い流し、薬を塗つてくれた。

トシの指先で薬を塗られるのは結構痛かつた。その指先は剣術で皮が固くなつていて力強い。でも、我慢した。痛かつたけれど、優しく塗つてくれているのがわかるから。その優しさに少しでも触れていたかった。

「終わりだ。・・・次は着替えか・・・。ここで待つてる。ハ木さんの奥さんに聞いてくる。」

そう言つてトシは部屋を出て行つた。カンナは自分の着ているものを見た。

・・・ああ・・・そうだ。

着物は脱ぎ捨ててきちゃったんだっけ？

・・・・・・・・・あれ？

・・・これつて・・・。

カンナは自分の胸元を見て気付いた。
何かが襦袢の下に入っている。

そっと出してみると、一冊の冊子だった。
濡れている。

カンナはようやく思い出した。

この冊子は通武のものだとこういふことを。

・・・！・・・うどりしよー」こんなに濡れてる。
・・・つ・・・大切なものなのに・・・。

カンナは冊子を開いた。

カンナはほつと息を漏らす。

辛うじて文字は読めるよつだ。

カンナは乾かす為にもぱらぱらと包帯で厚くなつた手を使い、器用に開いていく。

そこには、句がたくさん書いてあつた。

カンナにはこの時代の繋がるよつな文字などあまり読めはしないが、
句であることは確かだつた。

先へと進むと途中で紙は真つ白になつていた。
ほんとはまだ書き続ける筈だつたのがわかる。

カンナは適当にバラバラとページを進めた。

最後に来て、冊子はぱたんと床に落ちた。

しかし、カンナは何か最後の方に黒いものを見た気がした。

カンナは急いで最後のページをめくつた。

・・・何？

起一 時鳥 血爾奈く声盤 有明能 月与り他爾 知る人ぞ那

句であることはわかるのだが、ときれどきれでしか読むことが出来なかつた。

何故この句が他のページを抜かして最後に書いてあるのか・・・。そして、その字は他の句の字に比べ、震えて崩れていた。カンナはこの句には通武の気持ちが込められているのだと感じている。

しかし、読めないので意味がない。知ることが出来ない。

歳三はため息を吐いて部屋に戻ってきた。

すると、カンナは何かの冊子をジッと見つめている。

カンナは歳三に田を向けた。

「……ねえ、トシ・。これ読める?」

カンナはトシに句を見せた。

「ああ?・。・。・。」

歳三は難しそうな顔をした。

「……これが・。・。読んじまつて良いのか?」

カンナはこくりと頷いた。

「・。・。・。はあ・。・。
一 ほどときす 血に啼く声は 有明の 月より他に 知る人ぞ
なき 一 」

カンナにはその句の意味がハツキリとわかつてしまった。

通武は自分が孤独だと思っていた。自分の想いも志も夜明けの月にしか届かない

そういう意味だらう。

・。・。・。通武。

大丈夫。届いてるよ。貴方の想いも志も、充分届いてるから。
通武、貴方は一人じゃない。

私が居る。かつさんだつている。忘れていたの?

私たちは家族だつて。

一人じやないから。全部全部、私が知つてゐるから。
だから、悲しまないで。苦しまないで。

トシの指が私の頬に触れて涙を拭つた。

「・・・・・」

「(+)こつは幸せだな。こんな風に想つて泣いてくれる奴がいる。」

・・・そう・・・なのかな。
そうだといい。通武が幸せになつてくれないと、私も幸せになれない。
だから、絶対、幸せでいて。

「んじゃあ、とりあえずこれ着とけ。今女物はねえんだ。」

この家の奥さんの着物は私には随分と小さいらしい。
だから男物の着流しを借りた。

その着流しからはトシと同じ檜の香りがした。
この着流しもかなり大きく、身体には合わないけれど、小さいより
はましだといつ。

「なんか・・・変。」

「しゃあねえだろ。それしかねえんだ。」

確かに、さつきのあの匂は誰のもんなんだ？あの匂はあまり好きねえ。」

「とこりで、さつきのあの匂は誰のもんなんだ？あの匂はあまり好きねえ。」

「私の、兄さんの物なの。」

そう。大切な初めての家族。
私の兄のような人だつた。

「兄さんが居たのか。」

「血は繋がつていなけれど、出会つたのもほんとについ最近だけど、
すごく大切だつたの。」

これは、その人の唯一の形見。」

これしか残つていない。

でも、これを持つてゐるだけで、いろんなことを思い出せるから。
忘れないでいられるから。

「店主のかつさんと兄さんと私は、みんな一人で寂しかつた人が集
まつたようなものだつた。
だからこそ、その存在が大切である日常を壊したくなかった。
でも、私だけがこうやって生き残つた。それは一人が助けてくれた
から。」

生きてつて必死に私を想つてくれているから。だから私はここにいる。

二人がいなくなつて、私はひとりになつちやつた。ただずつと前 日常に戻るだけなのに、

すゞしく自分が孤独に感じて、今は生きているのも辛い、苦しいって思つ。

でも、二人が繋いでくれた命だから放り出すことは出来なくて……。

」

カンナの目には再び涙が浮かんできていた。

歳三はまた考えさせられた。

こいつは、なんて苦しみをこの細い身体で背負つてやがる？
重すぎる。こいつには重すぎるもんだ。

だが、こいつは一人でそれを背負つて耐えている。
自分の足でしっかりと支えて前に進もうとしている。

「お前は強え。・・・だから今も生きてる。

救つてもらつた命なんだろ？ その命が死きるまで精一杯幸せに生きる。

お前を想つてゐる奴等なら、お前が幸せになればいいとおもつてんじゃねえか？

笑顔でいられるんじやねえか？」

カンナは言葉もなくくつと頷いた。

「俺はお前が幸せになるための手助けぐれえはしてやれる。
さすがに、お前の背負つてるもんを持つてやる事は出来ねえがな。」

だから俺は敢菜に来いと言つた。

俺にしちゃあ、珍しい。新選組よりも女のことを考えるなんぞな。

仕事も放り出しちまつて。

今頃、総司が俺の分も仕事してんだろうが・・・。

・・・悪いことしちまつたな。

カンナは縁側で空を見上げていた。

「雨が降る・・・。」

「雨?」

「うん。雨の匂いがする。湿気も多いし。大雨になりそう。」

今大雨が降るのはありがたい。

火が消えるのも時間の問題だらう。

暫くしてカンナの言つとおり大雨が降ってきて、ちらほらと隊士達が急いで帰つてくるのがわかる。

「土方さん、居ます?」

「ああ。」

声からして総司が帰ってきたようだ。
総司はスッと襖を開けて入ってきた。

「やあ。敢菜ちゃん。手はどう?」

総司は本気で心配していた。

総司も敢菜を結構気に入っているのだ。

「大丈夫。軽い火傷だし。」

総司は一そつーといつて柔らかく笑った。

総司は濡れていると思ったのだがすすぐだけなだけで、全く濡れて
などいなかつた。

それを歳三が指摘すると、

「雨の匂いがしたから、早々に切り上げてきたんですよ。雨なら火
も消えるでしょう。」

カンナも同じように言ったが、歳三には雨の匂いなどわざこな変化
はわからなかつた。

歳三は思つた。この二人は猫のようだと。

「じゃあ、敢菜ちゃん。お大事にね。落ち着いたら遊びにでも誘う
からさ、

今日はゆっくり休んでよね。そつだ。土方さんに襲われないようこ
ね。」

総司はクスリと笑い軽く手を振つて去つていった。

カンナは冗談だと知り、ふふっと笑つた。

冗談を言つたのは総司なりの気遣いなのだろう。

カンナはそんな不器用で優しい気遣いに通武のようだと感じた。

カンナは少しだけ、希望が見えた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333t/>

北へ・・・

2011年12月25日13時47分発行